

幼保連携型 認定こども園 教育保育要領 五領域『表現』分野



SENSE OF WONDER

教育研究 【自我の発達と描画表現】

<キーワード>

自我の法則性、なぐり描きからイメージの秩序性、幼児画の特徴、発達段階、成長評価

【傘① (マナー)】



年中組『傘 (1/2)』



年長組『傘② (1/8)』

科学する心を育む



年長組『ざりがに』

すくすく
農園活動
大根抜き



年中組『大根』

年少組 絵画展鑑賞



三角形の構成



こどもギャラリー



創立 25 周年記念 表現分野研究資料

April. 2017 (平成 29 年度)

研究者 園長 三浦 瓊子

目次

はじめに 本研究の問題意識と目的	38
第1章 先行研究の整理	
第1節 自我の芽生えと幼児期の自己形成の過程	39
第2節 先行研究に見る幼児期の描画表現の様式と特色	42
1. 幼児画の一般的7項様式とM幼稚園の幼児の描画の調査	43
2. 幼児画の一般的11項特色とM幼稚園の幼児の描画の調査	48
第3節 自我発達と描画表現との関連性の年齢別整理	57
第2章 研究 自我と描画の変化に関する実証研究	
第1節 調査の意義と方法	
第2節 4タイプ別自我と描画の変化調査	
1. [調査1] 各学年別4タイプの前期4月~8月までの変化調査	
2. [調査2] 各学年別同じ4タイプの後期9月~2月までの変化調査	
3. [調査3] 年齢別個々の幼児タイプ別の描画表現の変化の動向調査	
第3節 第2章のまとめ	
第3章 成長項目別評価による自我の変化と描画表現の評価	
1. 評価の方法	
2. 手順	
3. 調査 成長項目別評価と暦年齢別描画表現の評価結果と考察	
4. 自我の発達と描画の評価のグラフ結果と考察	60
第4章 総合考察	
自我と描画の関連	62
第5章 まとめ 成果と課題	
1. 描画指導カリキュラムにおける振り返り	63
2. おわりに 幼児の教育	66
参考・引用文献	67
資料	72
承諾書	73
謝辞	74

※本論記載略

はじめに ——本研究の問題意識と目的——

生活の中で幼児たちは、素朴で素直な表現、泣くことや、やりきれない気持ち、自分が他の友達にどのように知ってもらえるのか、自分のそばにいる先生は自分をどのように助けてくれるのだろうかなど、いろいろな不安や喜びを感じながら過ごしている。そうしたことは、自分というものが育つ中で体験され、またそれを通して、さらに「自分らしさ」「これが私だ」という自分がつくられていく。こうしたことは「自我の育ちと」言われている。それでは、描画活動の中では「自分」というものが、どのように表れるのであろうか。画面の上で自分の思いが描画という形になることで、幼児たちは、物事を認識し自分の気持ちをコントロールしていく様子も観察される。

筆者は、幼児たちが集団の中で人間関係を学び、自己主張を繰り返しながら成長発達する様子を描画に見つけることが出来ると考える。

幼児の自我の発達には年齢によって描画にどのように表れるのであろうか。年齢に沿って変化する成長の様子を観察し心の動きの表出、つまり、幼児たちの自我の変化が、いかに描画に表現がされるのであろうか。

本研究では、その自我の発達と描画表現の関連について調べることを目的としている。この研究の手立ては、幼児の表出する特徴的な描画表現を先行研究と照合し自我と描画の関連を検証することにある。次に年齢層の一般的な成長の観点をもとに、約一年間の各学年の特徴ある描画を抽出、タイプ別に分類し、2歳児から5歳児までの各学年における割合を前期と後期で調査し、自我の発達変化を調査するものである。続いて一年間の個々の描画表現の変化を観察し、表現の変化から自我の成長を調査することである。まとめに年齢別に自己形成として、今までの調査1から3の結果を基に幼児期の成長はどのような特徴をもっているのであろうかと考えた。「ローウエンフェルドの評価表」は、M幼稚園の調査には難解なので筆者は、「ローウエンフェルドの評価表」を参考に調査の成長項目内容に質問と回答が現場に密着し平易であるよう、簡易の評価表を設定し調査をした。

就学までの心身の一般的成長と描画の関係を成長項目にしたがって自我の形成、成長の発達をみるものである。幼児の身体的、精神的、情緒的成長のこの大切な幼児期における描画との一般的な因果関係を正しく理解したいと考えるものである。この一連の流れの調査によって幼児の自我の芽生えから概念のイメージを膨らませ、描画表現の様式や特色を呈していく幼児期の筆者の目には見えない自己主張を明解にできると考える。

本研究の成果は、幼稚園生活における幼児が、感性豊かに健全に成長するための援助・支援の指導者側のスキルアップにもつながると思われる。

第1章

先行研究の整理

本研究の目的は、自我の発達と関連について調査することである。

そこでまず、第1節では、乳幼児から幼児期の自我の発達について保育所保育指針・幼稚園教育要領を参考にみていく。次に第2節で、幼児期における描画の発達に関する描画と先行研究を整理しておく。第3節では、自我の発達と描画の内容との関連について書かれている文献を特に取り上げてみる。

第1節 自我の芽生えと幼児期の自己形成の過程

(1) 乳幼児期の自我の特徴と自己形成の過程

自我とは自分自身の心・気持ちであるといえる。これは、加藤茂美^{註1}は「自分づくりの保育と構造」第2章(2)自我世界の誕生・拡大で「要求主体としての自分」であるとおさえている。それでは自我はどのように発達するのだろうか。その特徴は如何なものだろうか。

人間の赤ちゃんは、十か月以上、母親の胎内にいると頭が大きくなりすぎるので、母親の子宮から十か月前後で出産するといわれている。中川香子

(2006) ¹¹²は、そのため、「子宮外胎児」といわれると述べている。このことは、マリア・モンテソーリ「幼児の秘密」¹¹³「精神の胎児— 精神の肉体化」で、精神的胎児は、生まれるとたちまち、精神的に周囲の世界とのやり取りが始まり、このやり取りの過程が個人の間完成であり、肉体的対峙からいえば、つい、先ほどまでの母体の血管から養分を採った小さな気泡の機能に代わっての創造的作業がなされ、精神を肉体化する継続的仕事を胎児は自然に成し遂げる。と言っている。

このように考えると、まだまだ乳児の自我は、母親とともにあるので、はっきりとした自我は芽生えず一体化している。2歳ごろになると目と手、手と足などの協応動作が段々と上達をしてくる。精神的にも「自分で、自分で」という意志が明確になってくる。幼児がしたいと思っている心や気持ちを大人が阻止してしまうと、幼児は考えたりする能力や思いを巡らす思考力、新しい挑戦にも意欲を欠く結果になり、心の育ちを止めることになる。

幼児が自分で初めて、お箸を持って食べることが出来たり、着替えの洋服の釦かけが自分ひとりでできたり、その後3～4歳位になると物の運びがうまくなり心身のバランスがとれてくる。「自分もできる」という自信になり、自我は自制心をもとに自主性の成長に繋がっていく。また、マリア・モンテソーリ(1975)¹¹⁴は、自我の成長発達は無原則なものではなく明確な条件とともにある一定の法則性に従って秩序性をもって発達し多方面に表現されるものと述べている。

では、保育所保育指針・幼稚園教育要領の中では、どのように自我について記述されているかを参考に年齢別に下記に整理する。

(2) およそ2歳児ごろの幼児の自我

生後数か月が過ぎたころから子どもは、自分の意思を持って行動し始め多くの体験を吸収しながら自分の意思を固めていく。

その時、自分の意志が通らないことがある。幼児は、その意志を通そうと努力するがうまくいかないことがある。より一層強く自分の思いを通そうとするか、あっさりとおきらめてしまうか、どちらかの行為をするが、いずれも成長といえる。しかしこの差は育ちの違いとなる。家庭では、幼児の言いなりになるか幼児のすべてを否定してしまうかのいずれかである。

(3) およそ3歳児ごろの幼児の自我

園生活での同年齢や近い年齢同士になると、特に2～3歳児では自分中心である。自己主張で自我と自我のぶつかり合いがおこる。咬みついたり突き飛ばされたり、ぶつたり、ぶたれたりし自分の欲求を通そうとする。これは、以前に自己の意志を通した経験があるからで、精いっぱい行動であると思われる。また、ものに固執する幼児特有の姿を目の当たりにして、幼児同士のぶつかり合いが、一人ひとりの個性として人間としての成長に繋がっていると考える。

(4) およそ4・5歳児ごろの幼児の自我

自我の芽生えから友だちの中にいる自分という自我の過程を「第二の自我」と加藤繁美(1997)^{注5}は、説明している。幼児の自然な自我の芽生えから、集団の中で育つ「第2の自我」へ発達する。

(5) 本論でいう自我とは

自分の知っている事を主張する2歳児前後の自我拡大の描画表現であり「今、思っていることはこれだ。」と自分にこだわる心の働きである。

3歳児位からの自我の変化で「友達はどうなのだろう」と、他者との関係の下で物事を捉え、自分の存在を明確に誇張し「自分はこうしたい」という意思を自己充実させていく描画表現にみる心と態度のことをいう。

第2節 先行研究にみる幼児期の描画の表現の様式と特色

～M 幼稚園の幼児の作品から～

幼児期にあたる「前図式期や図式期」^{註6}の絵画表現には共通する表現様式がみられる。

表現様式の特徴については、これまでの多くの研究者によって数種類に整理されてきた。

例えば、ケルシェンシュタイナー（1905）^{註7}は、子どもが樹木や花を描く際に、特定の描き方を好んで行うことを見出した。つまり、子どもの描き方には特徴的な表現様式があること述べた。G・H リュケ（1927）^{註8}は「子どもの絵」の中で、子どもは直接見たものを描くのではなく、知っていることを描くと主張し、幼児期に独特な様式が表される。これを「知的リアリズム」ということを実際の絵を通して説明した。また、ヘルガ・エング（1983）^{註9}は「子どもの描画心理学」の中で、自分の娘マーガレットの描画から幼児期独特の表現様式や特色が見られたことを報告した。栗山誠^{註10}は、「子どもの描画研究の系譜と描画プロセスの発見」の中で「どのように絵を描くのか」というプロセスを分析している。ここからも子どもの描画表現の特徴の意味が見出せる。

これらの様式や特色は、本研究テーマである幼児の自我の発達と描画の関係について考察する上で、確認しておくべき事項であるので、この第2節でみていく。

さて、ここでは M 幼稚園の子どもたちの絵から幼児期の特徴（7 項の様式と 11 項の特色）に分けて整理していく。

1. 幼児画の 7 項の一般的様式と M 幼稚園児の描画調査

M 幼稚園の描画 図 10-1～図 16-2 の例を 7 項目の様式でみていく。

（1） 集中構図（集中比例法）

幼児はものを認識する力やものともとの相対的關係などの把握があまりできない。自分が興味をもったものや印象深いものを中心に大きく描く。



図 10-1 5 歳児
ボール投げごっこ



図 10-2 4 歳児
三つ編みポール遊び

M園の例

図 10-1・図 10-2 の例でみていくと、大きさだけでなく描く順序性が表現にみられる。自分より小さいボールを、自分より大きく描き、印象深い決められた三つ編みの色順番に集中をし、こだわって強調して描いている。

(2) 透視構図 (レントゲン描法)

内部に重点をおいて描き、外部を通して内部が描かれ混合したレントゲンのような表現をする。



図 11-1 3歳児

僕のスクールバス



図 11-2 3歳児

私のスクールバス

M園の例

図 11-1・図 11-2 の例でみていくと、幼児の絵が大人と違うのは知ったものを描くことが多い。幼児にとっては 目に見える事よりも自分の知っている内部を描きたいと思う。外部のスクールバスを透して内部の座席やハンドル、ステップ、友達を描いている。

(3) 正面構図 (正面性描法)

大半は正面向きの人物が多いが人物に限らず動物や花も同様である。



図 12-1 3歳児

はらぺこあおむし



図 12-2 3歳児

はらぺこあおむし

M園の例

図 12-1・図 12-2 で、見ていくと幼児の作品は、大半は正面向きである。人物に限らず動物や花も同様に正面向きで描いている。ここでも「はらぺこあおむし」の絵本を見たりお話を聞いたりしてから記憶の中であおむしを描いている。横向きの胴に顔だけは正面向きで描いている。

(4) 折半式構図（転倒式描法）

天地表現があり空に近いものは画面の上に地に近いものは下に表現し対称的に、展開図のように描く。また、物の周りに人物を円状に描く。



図 13-1 5歳児
つなひき



図 13-2 5歳児
バルーン遊び

M園の例

図 13-1・図 13-2 の例でみていくと、綱引きの表現に天地表現の対称的表現やバルーン遊びの展開図のような表現が描かれている。

(5) 多視点構図（異方向同存式描法）

同じ物を一つの点だけでなく、多面的に見る。形を一つの平面に並べる。



図 14-1 5歳児
園庭の桜の木



図 14-2 5歳児
ドッチボール

M園の例

図 14-1・14-2 の例でみていくと、同じ物を一つの点だけでなく多面的に描いている。桜の花の形を一つの平面に並べて描いている。一本の木に桜の花を表現している。ドッチボールでは、コートを上から見て、子ども達は正面を向いてコートの周りを描いている。

(6) 積み上げ遠近構図

近くの物は手前に、遠くの物は重ねないで描き積み上げて描く。空間への認識が出来るにしたがって遠近関係が表現できる。



図 15-1 5歳児
リズム体操



図 15-2 5歳児
リズム体操

M園の例

図 15-1・図 15-2 でみていくと、近く物は手前に、遠くのものは、手前のものに重ねないでその上に積み重ねて描く方法をとっている。

体操をするようすが友達との関係を積み上げて描いている。

(7) 基底線

下には地面を上には空を描いている。地面を一本の線で描いている



図 16-1 5歳児 綱引き



図 16-2 5歳児 バルーン遊び

M園の例

図 16_1・図 16_2 みていくと、運動会の綱引きのようすやバルーン遊びを描いている。画面に横一線で運動会の遊びを描いている。また、空の表現にも同じよう一線がひかれている。この「線の意味」についてローウエンフェルドの考えを解釈していく。ローウエンフェルド (1950) ^{註11}は基底線「base line」と呼んでいる。天地を幼児が表現するのは地からであり、画面下に引かれた一本の線は地面そのものであり自分の知っているものは、その上に描く。空間の認識が深まってくると地面に対しての空という概念で上の空間に太陽や雲を表現するようになる。空間や物体の様式的再現について、「この年齢水準の子どもは、空間関係の再現には一定の秩序がある。」という大発見を記述している。幼児は、「私はこの地面に居る」という様に考え、自分が環境の一部であるという集合体的意識の一つの象徴で表現されるとしている。この基底線がM幼稚園でも合致する描画に出あうことができた。この表現には幼児がもうすでに協同精神を意識しだし、この基底線の経験によって、幼児の自我が発達し自分が社会と繋がっていると感じ、ものともとのとのを関係付けられる能力を得たことになるといえる。

結果 幼児の描画①～⑦項の検証の結果

図 10～図 16 においてキャシーA・マルキオディ (2014) 注 12 やV・ローウエンフェルド (1963) 注 13 は、描画の様式について深く研究をしている。この文献を参照しM幼稚園の幼児たちの絵から、その様式に相応しいものを照合していくと明確に同じ項目と一致する描画を見つけることができた。冒頭の「はじめに」で本研究の問題意識と目的で視点にしたことが解明できた。

2. 幼児画の 11 項の一般的特色と M 幼稚園児の描画の調査

M 幼稚園の描画図 17 から図 28_2 の例を 11 項目の特色でみていく。

(1) 前期スクリブル（なぐり描き）から後期イメージへの芽生え

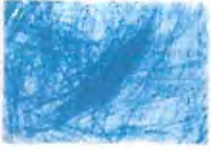







	A 君の描画	B 君の描画	C 君の描画	D 君の描画
なぐり描き				
イメージ				

図 17 好きな描画あそび 2 歳児

① エピソード

前期のなぐり描きでは「グルグル、シュシュ、ガチャガチャ、クルクル」と擬態語がある。手や腕の動きによる線跡を楽しんでいて、自分の思いをなぐり描きしている。色も単色である。満足するまで描いている。

後期では、イメージを膨らませてきている。ことばを添えながら自己表現を多くしている。円を描きだしたりし、顔に興味がいく。

A君は「アンパンマンだ！やったー！」 B君は「バイキンマン、エイ！やっつける！」 C君は「負けちゃったー？」 D君は「ウルトラマンだ！」と口々に描画に命名しながらイメージを膨らませている。

② 先行文献にみる検証と考察

ローダ・ケロッグ^{13, 14} は、基本的スクリブルと配置様式で、2歳児はそのスクリブルの全体領域については目と手の協同で描画される。そして、視覚的刺激を受け取るとスクリブル動作に伴い画用紙の空間、全体的な様子が変わって新しい図形が生じるのに反応すると述べている。A君 B君 C君 D君らは、実際に以上のような白紙上でのスクリブルから偶然の形に出会いイメージを膨らませていくものと考ええる。

(2) 自己表現

幼児は、心身共に未発達の状態、ものの見方、考え方、感じ方が自己中心的で主観的である。大人の表現とは違い幼児特有の表現をする。自分の感じたことを端的にとらえ、必要のないものは省略することが多い。



図 18-1 5歳児

「私、跳べたよ！」

なわとび



図 18-2 5歳児

「僕、泳げよ！」

スイミング

M園の例

図 18-1・図 18-2 の図の例でみていくと、明快な自己主張する表現がある。「先生見てみてみて！」と幼児のうれしい感情がよく表現されている。力強く主観的自己中心的な表現がある。

(3) 説明・伝達の表現

幼児は、知っていることや経験したことを具体的に絵で説明をする。その表現方法には、共通の形式がみられる。このことは、知的リアリズムとか、知的写実的と呼ばれている。



図 19-1 4歳児

「うまく隠れたよ！」

かくれんぼ



図 19-2 4歳児

「陣取り勝てよ！」

陣地とりゲーム

M園の例

図 19_1・図 19_2 の例でみていくと、友達とかくれんぼしている様子や陣取り遊びの描画だが共通の形式として異方向同存描法・転倒式描法・レントゲン式描法・積み上げ遠近法がみられる。かくれんぼをして逃げる友達を描き、陣地が広がる様子を積み上げて描いている。経験したこと、知っていることを伝えるかのように追加して描く。

(4) 対象の区分表現 一つ一つを部分的に見る。視覚的観点が強調される。



図 20-1 4 歳児

「みきちちゃんの顔だよ！」

友達の顔



図 20-2 5 歳児

「やったあ！でんぐり返り」

マット遊び

M園の例

友達の顔の部分の一つ一つを描いている。でんぐり返りの自己主張をしている。人物を描くのに顔のパーツ、頭、胴、手、足と区切りをつけて描いたりする。これは部分的に見て各々を説明的に表そうとしている。

(5) 展開図のように描く 上から見た展開図のように描く。



図 21-1 4歳児

「みんなで広げたよ！」

バルーン遊び



図 21-2 4歳児

「みんなでぐるぐる走ったよ！」

マラソン遊び

M園の例

図 21-1・図 21-2 の例でみていくと、向こう側の友達を上から見たように描く。運動場でバルーン遊びやマラソンをしている様子であるが展開図のように周りを取り囲んで描いている。上から見た展開図の表現である。

(6) 基底線を引く 天と地に横一線に描きその上に自分や友達を描く。



図 22-1 5歳児

「はい！バトン、タッチ！」

リレーごっこ



図 22-2 5歳児

「パレード楽しいね」

パレード遊び

M園の例

図 22_1・図 22_2 の例でみていくと、運動会のリレー遊びを描く。また、パレード遊びをしている自分を描く。基底線を引くことで安定し、自分の存在を誇張しているかのようである。空間の認識ができてくると考える。

(7) 時間の流れを描く

時間の経過を画面上に描き、それにはストーリー性がある。



図 23-1 4歳児

「おいでよ、手をつなごう！」

手つなぎごっこ



図 23-2 5歳児

「ドッチボール！しょっと！」

ドッチボール

M園の例

図 23-1・図 23-2 の例からみていくと、友達がどんどん後からやってきて遊ぶ様子であるが、時間の流れを一つの画面に描きはじめ時間の経過を描く。ストーリー性があり描きながら絵がどんどん変化していく。

(8) 花や太陽に顔を描く

幼児期のアニミズムがみられ、何にでも目や口を描く。



図 24-1 3歳児

「あま〜い！いちごさん」
甘いイチゴ



図 24-2 5歳児

「イソギンチャクさん集まれ〜！」
水族園のイソギンチャク

M園の例

図 24-1・図 24-2 の例からみていくと、いちごとイソギンチャクに顔を描いているが 太陽や花や果物に人間と同様に顔を描く。すべてに人間と同じように命を感じるのである。幼児期のアニミズムがみられる。

(9) バランスにこだわらずに描く

つりあいを考えていない。必要なことを強調して描く。



図 25-1 3歳児

「あっちゃん、あ・そ・ぼ」
ともだち



図 25-2 3歳児

「よしくん、あ・そ・ぼ」
ともだち

M園の例

図 25_1・図 25_2 の例を見ていくと、友達と遊ぶようすを描いている。釣り合いに拘らず顔が大きかったり胴や足が小さく描いたりする。自分と友

達を描き、顔を大きく足や体は小さく描いている。相互の位置関係の未熟さで顔は大きく胴や足が小さいなどバランスが悪い。

(10) 記号を使って描く

必ず花はチューリップ、画面上には太陽を描くなど、知っていることを記号のパターンで描く。



図 26-1 4歳児

「鉄棒出来たよ！」鉄棒



図 26-2 3歳児

「青虫さんのお散歩だよ」あおむし

M園の例

絵の中に必ず太陽を描きチューリップは花の印を決めて描いている。やはり知っていることを記号のパターンで描いている。公式画と呼ばれる基本概念の分化で内容の区別が進み正確な限定となる。植物は大抵チューリップとなり家も太陽も一定の形で描く。

(11) 装飾をして描く スクリブルから幼児は自然に装飾へと移行する。



図 27-1 3歳児

「ママかわいい」ママのお化粧



図 27-2 4歳児

「お出掛けするの？」ママのお出掛け

M園の例

図 27_1・図 27_2 の例をみていくと、好きなお母さんを描いている。幼児は飾りたいと思う心が多い。本能的に描いたものに部品をつけたり、色カラフルにして描く。口紅をつけたり、イヤリングをつけたりして描く。この装飾性については、ケルシェンシュタイナー^{注15}は考察している。

(12) 夢や希望や願い事を描く

想像を描く。自分が成りたいと思うことを描いたりする。



図 28-1 5歳児

「海の中をみたいな？」

水族園



図 28-2 5歳児

「スイミング大好き！」

スイミング

M園の例

イルカにになって海で泳ぎたい。水泳が得意になって、オリンピック選手になりたいという思いで描いているようである。

想像しながら夢や希望を描いたり雨のあとには虹…と描いたりする。

第2節の幼児の描画の様式と特色の整理

第2節では、先行研究とM幼稚園の描画 図 10_1～図 16_2、図 17～図 28_2 で、同様な描画の様式や特色を見つけることができ整理ができた。

年齢的に表出する自我と描画との因果関係がその時その時の幼児の心持

ちや感情の変化で描画にも反映しているように考える。続いて、第3節で各年齢別に自我の発達と描画表現との関連性を幼児の描画を通して調査していく。

第3節 自我発達と描画表現との関連性の年齢別整理

ここまでの2節では、M 幼稚園児の描画を先行研究に照らし合わせて調査してきた。自我の発達に伴って幼児特有の描画様式や特色が先行研究と同じように表現されていることが解った。

それではこの2つの関連はどのように説明できるだろうか。各年齢別にその描画の特徴を整理した後、次の2章の調査のための下準備をする。

1歳児から2歳児ごろの描画を観察していくと、形らしものではない「なぐりがき」である。次第に月齢にともない多くの幼児の場合、順序性を見出すことが出来る。このことは幼児の身体的発達の上での手指機能に基づいていると考える。つまり、なぐりがき・乱画・錯画・スクリブル (Scribble) はローダ・ケログ (1969) が言う「線描き遊び」として捉えられ、手の運動の軌跡であるところから心身の発達の条件を必要と考える。その条件の要因は手が自由に動けること、身の回りの環境の刺激から描いてみたいという心理的要因が揃うことにある。こうしたことは、自我の芽生えを促す活動と捉える。

3歳から5歳頃までの描画の特徴として、1940年代の3～5才の自我の発達と描画の関連について直接的に論じている文献は少ないが、その中でもローウエンフェルドの研究は大いに参考になる。ローウエンフェルドは、「発達段階表」¹⁴⁾と年齢ごとの課題を示唆している。教師が子どもの描画発達を人間性・社会性の発達とし自我の変化に目安とできるような特徴を研究してまとめている。しかし、この1940年代暦年齢の描画と、現代の幼児の描画を比べてみると情報過多の環境で発達が、今は少し早くなっているように感じる。なぜなら暦年齢の描画には、刺激によってスピード

化しているのではと思われる。幼児画の変化する様子は、人間の誰もが最初のスクリブルに始まり、その時、刺激を受けた精神は幼児のイメージの表現を確立させていくものと考えられる。幼児の描画を表面だけで観察している限りでは幼児の内面を見出すことはできない。子どもが成長する中で次第に自分自身を認識してイメージが誕生する。中沢和子（1979）¹¹⁷によるとイメージの誕生は、自我の発達の道筋は自然の法則性に従い秩序性をもって発達し、また、描画表現形式は年齢や成長に沿って表れるがそれは一定の順序性が見られると説明している。V・ローウエンフェルド（1963）によると幼児は、イメージとして形成されたものをそのまま表出しようとするのは、意識的、知的機能であるといっている。そして表現は、発達状況の相違や幼児の生活や遊びを背景に深く影響をしているので様々な形として表れる。しかも、幼児の知覚や感覚の発達は年齢段階において表出が異なる。1～2歳のなぐり描きの時代から3歳～5歳に成長する段階で自分のイメージを膨らませ、自分の知っている情報を駆使しながら特徴を発揮している。その特徴は子どもの認識上のことで発達の順序（法則性）として「イメージの誕生」だと考えられる。周囲の物事を認識し描画の上でイメージをしたものを具現化し自己同一化¹¹⁸をして自己認識をしていく過程と考える。これらは、先行研究者のローダ・ケロッグ¹¹⁹の「全世界の幼児描画発達の過程は共通である」という考察と同様にキャシーA・マルキオディ（2014）¹²⁰も同様に述べている。このように幼児の特徴は確認できたので、次に事例として年齢発達に伴い描画の表現にも顕著な変化がM園の幼児の描画の発達過程で、凡そ、同じであることを見出せるものだろうか。自我の変化を描画と並行して調査をしていくこととする。まず、研究調査に向けて第2章の前段階として次の下準備の手続きをした。集団の刺激を受けていない幼児たちの4月初期の描画を無作為に12枚抽出し4タイ

ブに分類した。その描画については、「資料 2-31」で示している。手続きの項目は、材料収集・対象・調査員・抽出分類・期間・安全の項目である。

研究調査前の手続き

- ① 材料収集：表現領域 320 名の描画より無作為に各学年よ 12 枚ずつ抽出する。
- ② 調査対象：H26 年度 M幼稚園園児の無作為に抽出された各学年約 12 名ずつの描画を対象に 4 つのタイプ別に分類をする。
- ③ 調査員：筆者 並びに各学年の代表担任 2 名、計 9 名で調査をする。
- ④ 分類内容：年齢別・同条件・月別描画カリキュラムによる描画とする。
- ⑤ 調査期間：H 2 6 年 4 月上旬～H 2 7 年 2 月まで
- ⑥ データ材料のセキュリティーとプライバシーの保護について
：園内の常設展覧コーナー「子どもギャラリー」で公開をしている。研究の材料として文章と展示で保護者は周知している。承諾書は「資料 32」で添付している。

4. 自我発達と描画の評価のグラフ結果と考察

7つの成長項目別評価表の結果グラフ、図 30-1～図 30-7 から考察をする。

知的

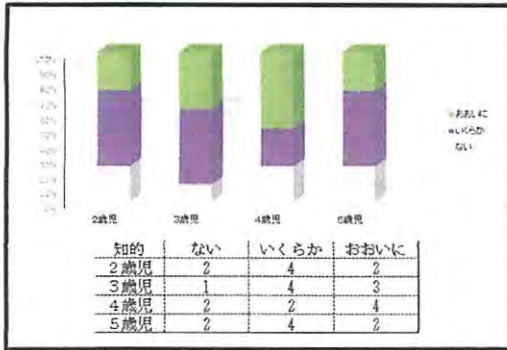


図 30-1

結果 考え方が年齢増とともに徐々にレベルが上がっている。

考察 2歳児は無意識の中にあるが年齢増により意識化した能力が増す。

情緒的

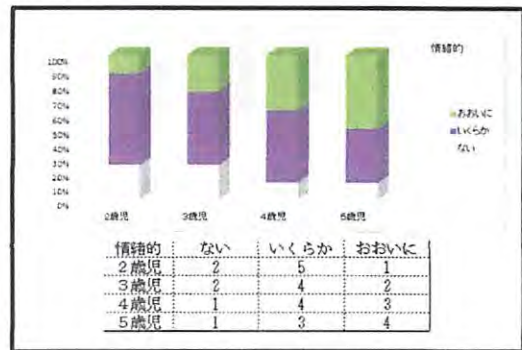


図 30-2

結果 感情面は年齢増とともに豊かになっている。

考察 気持ちの上で2歳児は自我が芽生えてくるので、情緒が不安定。5歳児になると豊かになる。

社会的

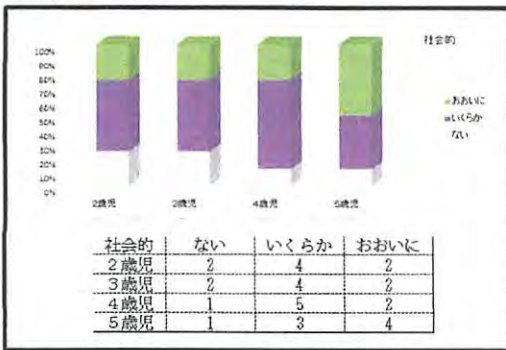


図 30-3

結果 4歳ごろから社会性が増加する。

考察 自己の世界から他者との関わりで発達する。第2の自我が拡大していくと考える。

知覚的

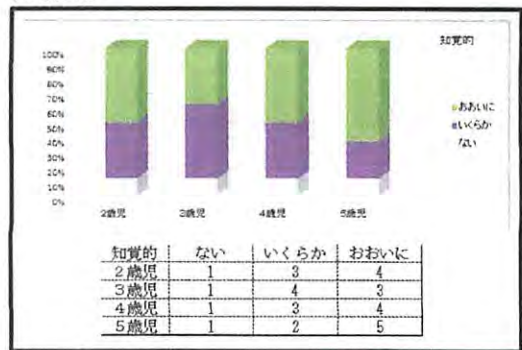


図 30-4

結果 2歳児と5歳児の知覚は同じレベルであるが、質的に認識の度合いに違いがある。

考察 2歳児の感覚は敏感である。年齢増により認識が深まる。

身体的

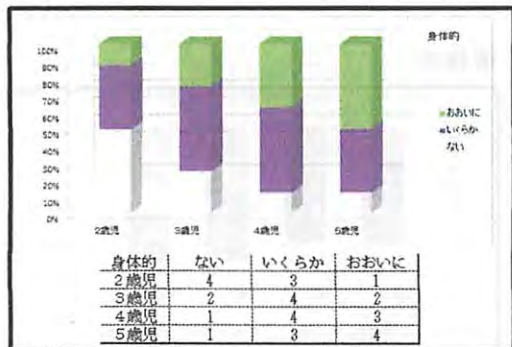


図 30-5

結果 2歳児と5歳児は同じ様に身体の影響が大きい。

考察 身体の発達は描画の表現に大きく影響すると考える。

美的

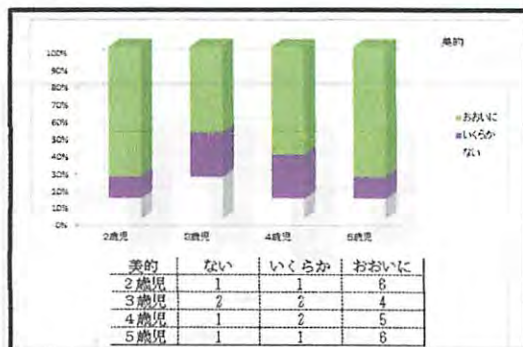


図 30-5

結果 2歳児のなぐり描きの時期は変形形にしようとする意識が見える。4歳5歳になると意図的な装飾意識がある。

考察 2歳児の形や色へのこだわりはあるが、まだ十分ではなく、5歳児の装飾性とは異なると考える。

創造的

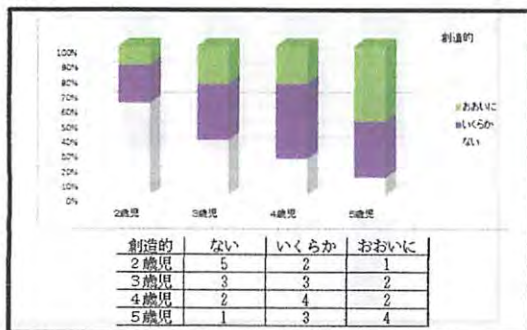


図 30-7

結果 感情面は年齢増とともに豊かになっている。

考察 気持ちの上で2歳児は自我が芽生えてくるので情緒が不安定。5歳児ごろには創造が豊かになると考える。

第4章 総合考察

自我と描画の関連性

自我の発達から描画を見たときに表現は、はじめは、気の向くままに手を動かして、動かした通りに紙に跡がついていることを発見して楽しんでいる。力強い線・ゆっくりとした柔らかい線・固い線・途切れた線・点々のぶつめたような線等、表出されている。やがて、偶然できた形に「～みたいね!」とみたてて画面上で遊びだす。どんどん描いていくうちにイメージがますます広がっていく。自分の知っている体験を描き、何回も同じ形を描いているうちに、何かの感情を表現しようとした時、思いの強いところをデフォルメして描き出す。

3～4歳児頃には、自分のストーリーは、広がり記号のように描きシボリックにとらえる。そして、様式化をしてくる。この生得的な発達段階は飛び越えず順序よく段階を踏み自然で素直である。

逆に、描画表現の発達により幼児の自我がどのように変化するかといった点は、一般的に心身の発達の成熟や成長と関連しつつ、自我も一定の秩序で変化していくものと考えられる。

例えば、思い通りに表現できなかった時期から、自分の考えが伝えられ、新しい自分を自ら発見したり、絵を描くことで、表現の楽しさ、面白さをもつようになり、自分の得意な面が発揮されて嬉しく感じたりできるようになる。このように描画表現の発達により自己実現が画面上で同一化でき自己充実を感じることができるようであろうし、この過程で自尊心が大きく育つと思う。

そういった点を予測する故、自我と描画の関係は密接で「表裏一体」であると考えられる。この順序性の発達段階表は、すでに多くの研究者によって発表されている。子どもの成長発達も描画の発達段階の特徴も遅速に関わらず、必ず一定の法則に従っている。しかも先行研究の例示する描画には、必ず年齢が付けられているのには研究者たちは、そこに大切な意味を潜ませている

という主張がある。両者の関係性は描画発達段階と年齢や内面的自我の表出においては、ほぼ同格に関連があると考ええる。

M幼稚園の描画にも、この関係性が確立されていることを確信した。ただ、未解明は、この表出時期は、現代の子どもの属する文化的環境によってスピードやその表現の内容に違いをあることを調査していないことである。

しかし、幼児自身が、「面白い、楽しい、嬉しかった、悔しかった、怖かった、こうなったらよいのに」等、自分の心を思う存分描け、心自由に表現する描画遊びは自我の成長に不可欠である。私達、大人は、あまり“あれこれと干渉せず” ゆったりと子どもの楽しんでいる表現を見守るがよいと考える。

第5章 まとめ

成果と課題

1. 描画カリキュラムの実践における振り返り

これまでの調査や照合で分かるように、描画カリキュラムの実践を通して、「自我の発達とともに描画表現が深く関わり変化する」ことが明確である。各年齢別の系統立てた描画カリキュラムの一年間で幼児の成長を捉えることができ、自我という自分の思いを幼児自身も認識できる表現活動である。自我が発達すれば確実に描画表現も変化していることを確認できる。

【2歳児】自我の表出 「心・ことばのスクリブル」

なぐり描きを楽しんでいる様子が表現されている。描くものと紙があれば、大いに描いて喜ぶ姿がある。そして後期に入るときは、絵に短い話をつけてイメージを膨らまそうとしている。はじめは、力強い筆圧で右回りに線をグルグル描いていたがそのうちに手の動きで重なりが出来てくると面が形に見えてきたようす。次にはその形を命名して今までの自分の知っている事柄や名前をやたらと言葉にする。更に丸を意識しだし、はじめに円を描きだしイメージを言葉と手を同じくして表現していく。何となく描

いた形がアンパンマンであったり、友達と同じものを描こうとしたりしながら、自分の中にあるイメージに集中して思いを表出している。

【3歳児】 個から集団 「空間発達：面積のバランスの理解」

偶然性を想定した画面との出会いで描写力や混色などの体験を目的とし、終始一貫、円にこだわってリズムカルに展開をした。

理解力や集中力が弱い子どもは、画面上に苛立ちやジレンマが線に表出している。「なぐり描き」の自己主張、つまり、自我の現象を観察できる。

時には、途中で活動が中断したりする。しかし、スモールステップ方式で保育者がモデリングを行うと模倣ではあるが慎重に描く。保育者にアドバイスを求めながら進めることで自分を主張している様子が見える。

集団生活において今後の成長過程で描画に変化が現れるのは確かである。

【4歳児】 2 D i m e n s i o n s の平面上の世界での自己実現の表現活動をしている。理解力や思考の発達、機能の発達がまだ不安定なので、「うまく丸が描けない」「筆がうまく使えない」と言って「できない！」と誤ってしまっている子どもがいる。体験の少ない子どもは、特に2年保育児は初体験な場合に自尊心が目立ち手を動かそうとしない子どもがいる。うまく描こうと意欲はあるにもかかわらず躊躇して描こうとしない様子がある。3歳児ごろは、はっきりと物への意識化が出来るので表現の偶然性によって出来る画面で感動して、意欲的に次への興味に繋がっていく描画体験が自信となっている場合が多い。4歳児としては、「描きたいことを思ったように描ける」

⇒「平面上での自己実現」の想像力を掻き立てるカリキュラムを設定しているところだが、その表現力はダイナミックで描画に動きを感じる。その成果は5歳児に進級した時期に様式化や、特色として顕著に表出してくる。

【5歳児】 3 D i m e n t i o n a l を表現したいと幼児たちは模索をしている。見えないものを意識して立体感や遠近感を想像しながら描こうと

する。この時期は大抵、機能的にも落ち着いて発達をしている。技法や作業の多い工程に対しても個人差は小さくなる。自由な時間での描画への取り組みは意欲的である。「感性・観察力・思考力・経験」を基礎にその興味と好奇心は、幼児期の自己形成の要素といえる。描画は、個々に力強い感性で個性的に表現している。「夢中で描くタイプの集中型」の幼児は、テーマに集中して描き、よりの確に内容を深めてストーリー性を帯びてくる。友達が気になり他と比較をしながら描く「慎重型タイプ」では、不安なことに出会うと保育者に確認をする。友達の模倣を忠実に表現する。描こうとしない意欲的でない「依存型のタイプ」では、「何を描くの？」と保育者に尋ねる。自分本位で「自己中心型タイプ」は、個性的で独創的で自己同一化をしている。

9月以降は、幼児の主体性に重きをおいて配慮し「自分で考えて描ける」ことをカリキュラムにした。「聴く」ことから想像し、そして、創造する喜びを感じ自信となる姿が顕著に観察できた。自分のイメージとしてどのように表現するか思考を巡らし自発的表現を活発にできるよう情報を多く提供し興味や好奇心の刺激になるよう心掛けた。その結果、4クラスでの特徴が表現に見えた。クラスでの普段の生活が目に見える形（描画）として表面化した。

保育者は子どもの表現を見る力、感じる心が必要である。この「表現」活動は、教育要領「人間関係」と深く関わっている。追述とし「自我と描画の関連性」から描画活動を考察してみると心的発達と同様に幼児の描画にも一定の順序性がどの子どもにも見出せる。この順序性の発達段階表はすでに多くの研究者によって発表されているので今後も参考にする。子どもの描画の発達段階の特徴は遅速に関わらず必ず一定の法則に従っていると考察をした。また、先行研究の例示する描画には必ず年齢が付けられている。両者の関係性は描画発達段階と年齢や内面的自我の表出はほぼ同じである。が、現代の子どもにおいては、平均的データとして検証・結果として、子どもの属する文化的環境によって大きく表現の違いがあるのではと考える。

2. おわりに

幼児の教育

次のことを焦点にあて、伸びる幼児たちの幼児教育を計画していく。

1. ことばに視点を合わせる

言葉の獲得ができたすと子どもの描画活動も心豊かになり得ると思い、「聴く保育」の方法を研究していく。

2. 必要となる強化課程の特例

幼稚園教育要領5領域の『言葉』と『表現』を重視し、幼児の言語発達を記録・分類・データ分析、幼児の「生きる力」を援助していく。

3. 今後の成果の評価方法

特に個から集団への過渡期にある2歳から3歳児の成長に焦点を当て、教育に系統立てた描画表現活動が実践でき、幼児には、体験が豊かに吸収できるよう、その度毎に成果の評価を見直す。

幼児の表現活動、特に描画活動において自我の発達や社会性の学習についてどのように計画を成すべきか。幼児の表現を受け止め整理を行う。

データをもとに幼児の心理を理解し言葉の発達を促し、幼児が近い将来、主体的に活動できるよう支援していく。

本研究は、多様な発達を観察するため、基礎項目を設け試みた。

これば、成長とイメージの描画表現との間の密接な関係があることを解明するためのものである。描画において重要な面を明らかにするのに役立つことである。また、幼児の成長に関連してその描画を理解するためのツールを提供する旨となる。幼児の自由な成長を守ること、すなわち「どの幼児にも、おおいに発揮している。

健全な人格を育成する迄、公平な機会を与えることが、おそらく現在一番なことであると、いっそう強く感じる。よりよき未来のために、描画

表現は、堅実な人間の基礎をつくる唯一の道と考え、今後の保育室でのプログラムは、幼児と向き合う直観的な方法をとるのがよい。と次への課題にしておきたい。

参考・引用文献

「注」

注1 加藤繁美著、「自分づくりと保育の構造」、ひとなる書房、1997、p. 75

注2 中川香子著、「お母さんにわかってほしい幼児期のお絵描き」、

PHP 研究所、2006、p. 20

注3 マリア・モンテッソーリ著、「幼児の秘密」、鼓 常良訳、国土社、1968、pp. 40-49

注4 E. M. スタンディング著、「モンテッソーリの発見」、

クラウス・ルーメル監、佐藤幸江訳、エンデルレ書店、1975、

pp. 138 注5 加藤繁美著、前掲書、pp. 72-80

注6 V・ローウエンフェルド著、「美術による人間形成」、竹内清訳・

堀内敏訳・武井勝雄訳、黎明書房、1963、p. 11、p. 155、p. 181、

p. 220 注7 山崎高哉著、「ケルシェンシュタイナー教育学の特色と意義」、玉川大学、1993、pp. 196-211

注8 G・Hリュケ著、「子どもの描画」、須賀哲夫・毛塚恵美子

・吉田博子・五十嵐佳子監訳、金子書房、1979、pp. 179-219、p. 184

注9 ヘルガ・エング著、「児童の描画心理学」、深田尚彦訳、ナカニシヤ出版、1983、p. 106

注10 栗山誠著、「子どもの描画研究の系譜と描画プロセスの発見」、大阪総合保育大学紀要第6号、2012、pp. 152-154 注11

V・ローウエンフェルド著、前掲書、

黎明書房、1963、p. 83、p. 189、p. 190、p. 192、p. 283

注 12 キャシーA・マルキオディ著、「子どもの描画からわかること」、小林芳郎訳、田研出版、2014、p. 139

注 13 V・ローウエンフェルド著、前掲書、黎明書房、1963、p. 87、p. 155、p. 181

注 14 ローダ・ケロッグ著、「児童画の発達過程」、深田尚彦訳、黎明書房、1971、p. 18、p. 27

基本的スクリブル、p. 18 と配置様式、p. 27 で『2歳児は、スクリブルで・・・・・・・・・・視覚的刺激を受け取る。スクリブル動作に伴い、描き込まれるので、白紙の空間、全体的な様子が変わって新しい図形が生じるのに反応する。もし線と空間が何かの形を示唆しようものなら児童はその形を完成するだろう』と記述している。注 15 山崎高哉著、前掲書、玉川大学、1993、p. 200、p. 230、p. 253、p. 431 注 16 V・ローウエンフェルド著、前掲書、黎明書房、1963、pp. 85-97

注 17 中沢和子著、「イメージの誕生」、日本放送出版協会、1979、pp. 37-38

注 18 V・ローウエンフェルド、前掲書、黎明書房、1963、pp. 51-57、p. 76

注 19 ローダ・ケロッグ著、「児童画の発達過程」、(基本的スクリブル)、深田尚彦訳、黎明書房、1971、p. 18

注 20 キャシーA・マルキオディ著、前掲書、

『・・幼児画の発達の過程は共通である・・』。

小林芳郎訳、田研出版、2014、p. 113

注 21 エリ・エス・ヴィゴスキー著、「子どもの想像力と創造」、広瀬信雄訳、落合果子発、2002、pp. 21-25

幼児の描画表現の一定の法則性を「子どもの想像力と創造」において、創造活動で最も重要な法則は、第1に子どもの豊かな経験が必要であり、第2の法則は想像が経験を豊かに広げるものであり知的活動が不可欠としている。第3はあらゆる感情や情動が空想と現実の総合

形態によっていることであり想像は一定の様式として現れる。これらは第一の法則に完全にしたがって経験を基に想像力が成り立っているとしている。人間の想像について次の引用を記述する。・・・

ⅣⅢ 『人間の感情はずっと以前から自分の内的な状態を外的な印象づけの方法で表すことを身につけたのとまったく同様に空想のイメージが人間の感情にとって内的な表現の役をします。』

と、描画の情感について一定の法則性を述べている。

注 22 ヴィクター・ローウエンフェルド、前掲書、1963、 p. 109、 p. 146、
p. 170、 p. 222

p. 222 では年齢別の評価表を示している。この評価表は発達段階でも用いることができる。子どもの成長状態の輪郭を知るのに用いられる。

「文献」

1. アドルフ・ボルトマン著、「人間はどこまで動物か」、高木正孝訳、G121、岩波新書、1960、p. 72、p. 123-124、p. 199、p. 244
2. キャシーA・マルキオディ著、小林芳郎訳、「子どもの描画からわかること」田研出版、2014、pp. 113-118
3. E. M. スタンディング著、「モンテッソーリの発見」、クラウス・ルーメル監、佐藤幸江訳、デルレ・ハンス・ルーベルト、1975、pp. 138-149
4. エリ・エス・ヴィゴスキー著、前掲書、2002、pp. 21-25
5. G・H・リュケ著、前掲書、1979、pp. 179-219、p. 184
6. 林健三著、「幼児の絵と心」教育出版、1976、pp. 64-73

7. 早田由美子著、「モンテッソーリ教育思想の形成過程——知的生命の援助をめぐる」、井村寿人発、2003、p. 100、p. 114
8. ヘルガ・エング著、前掲書、1983、
p. 3-4、pp. 10169、p. 148、pp. 175-181
9. ヘレーネ・ヘルミング著、「モンテッソーリ教育学」、
平野知美・原弘美訳、エンデルレ書店、1982、pp. 153-159
10. 板井 理著、「子どもの絵はおはなしいっぱい」、大阪保育研究所編・秋
葉英則監修、フォーラム 'A' 発行、1996、p. 207、p. 213
11. J. ヘンドリック編者、石垣恵美子・玉置哲淳監修、
「レッジョ・エミリア・保育入門・保育者はいま何を求められているか。
第3章 展覧会からのレッスン」、北大路書房、2000、p. 189
12. 小西行郎著、「赤ちゃん学カフェ」、2008、vo-1、pp. 18-22
13. 小西行郎著、前掲書、2010、vo-3、pp. 28-32
14. モーリス・メルロ＝ポンティ著、滝浦静雄・木田元共訳、
「眼と精神」、みすず書房、2005、pp. 156、pp. 186-188
15. 松井公男・郡司修二著、「ピアジェの幼児教育シリーズ 5。
表現あそび」、明治図書出版、1978、p. 15、pp. 25-26
16. 松浦鶴造著、「モンテッソーリ教育の研究」、五月書房、1986、pp. 129-
134
17. マリア・モンテッソーリ著、「幼児の秘密」、鼓 常良訳、国土社、1968、
p. 47、pp. 50-61
18. マリア・モンテッソーリ著、「創造する子供」、
菊野正隆、武田正實監修、エンデルレ書店、1973、pp. 18-29
19. マリア・モンテッソーリ著、「子どもの発見」、中村勇訳、
日本モンテッソーリ教育総合研究所、2003、p. 79、pp. 385-387
20. 文部科学省、幼稚園教育要領解説(付録：保育所保育指針)、フレーベ
ル館、1950、pp. 277-279

21. 内閣府・文部科学省・厚生労働省原本、「認定こども園教育保育領」、
1952、p. 214、p. 227
22. 中沢和子著、「イメージの誕生」、日本放送出版、1992、p. 4、pp. 11-13、
参照：V・ローウエンフェルド、1963、
pp. 168-179、pp. 36-47、pp. 88-92、p. 100、pp. 159-162
23. 中川香子著、「お母さんにわかってほしい幼児期のお絵描き」、
PHP 研究所、2006、p. 20
24. 岡本夏木著、「幼児期—子どもは世界をどうつかむのか—」、岩波書店、
2005、p. 46、pp. 80-144
25. 落合恵子著、「0～7歳を大切にするシュタイナーの子育て」、月刊ク
ーヨン編集部、落合恵子・クレヨンハウス、2009
26. ローウエンフェルド著、勝見勝訳、「子どもの絵」、白揚社、1976、
pp. 35-40
27. ロード・ケログ著、深田直彦訳、前掲書、黎明書房、1969、pp. 18-
35、p. 148、p. 235
28. ラヒマ・ボールドウィン著、合原弘子訳、
「赤ちゃんからのシュタイナー教育子どもの魂の夢見るような深みか
ら」、学陽書房、2000、pp. 132-134
29. 鈴木まひろ・久保健太著「社会福祉法人わこう村和光保育園
育ちあいの場づくり論」、ひとなる書房、2015、pp. 9-27、p. 106
30. 勅使千鶴著、「子どもの発達と遊びの指導」、
ひとなる書房、1999、pp. 28-44、p. 121、pp. 135-139、p. 197、p. 208
31. としくらえみ著、「子ども・絵・色」、イザラ書房、2001、 pp. 72-78、
pp. 150-156
32. 山崎高哉著、「ケルシエンシュタイナー教育学の特色と意義」、玉川大

資料 I

1. 一年間の各学年別カリキュラム <資料 1>

2. 一年間の各学年別 12 枚のタイプ別分類描画 <資料 2-31>
3. 承諾書 こどもの描画表現の研究 <資料 32>

資料 II

V・ローウエンフェルド著「美術による人間形成」

—— 創造的発達と精神的成長 ——

参照 評価表 p.142、p.146、p.170、p.222

1. 要約 なぐり描きの段階 (2才 - 4才) <資料 33>
2. 評価表 なぐり描き段階 (2才3才4才) <資料 34>
3. 評価表 様式化前の段階 (4 - 5^{1/2}才) <資料 35>
4. 評価表 様式化の段階 (5 - 7才) <資料 36>

承諾書 こどもの描画表現の研究

平成26年4月1日起

保護者の皆様・並びにご代表様

ギャラリー展示（こどもの描画表現）

＜テーマ＞人格形成（自己表現）とこどもの発達表現において

五領域【すべての環境を通して、健康・言葉・人間関係・環境（人的・物的）・表現】での表現分野での研究として、子どもの発達の変化を展示しています。

子どもの描画については、次のように考えています。

描画遊びの表現活動においては、各年齢別で出来上がった作品を無作為に抽出し、子どもの発達を捉えて研究していこうとするものです。

凡そ、子どもの機能の発達とその表現との関連で、子どもの人格形成の発達を見ようとし、理解していきます。子どもの人格形成の発達と共に、自我の変化を写真化して、みんなで共有・感動することで、明確にこどもの成長を『見える化』しています。

この展示には、氏名・性別などの明示はありません。また、描画の研究資料として研究以外の目的には使用しません。

認定こども園みどり丘幼稚園 学園長 三浦環子



承諾書

平成26年4月1日起

上記の件につきまして理解致しました。

認定こども園みどり会

会長

野上 彩



サイン

平成26年4月1日起

謝辞

描画を通しての幼児の自我を理解できればと、この研究に挑みました。しかしながら大変な課題であることが研究を進めていくうちに認識をしました。途中でテーマを変更すべきかと何度も迷いましたが、多くの大学院の教授の先生方にアドバイスをいただきました。

栗山 誠 教授には、特に本論文作成に当たり研究が暗礁に乗り上げていると、その分野にぴったりとあう著書を示され、都度お貸し下さり、静かに論文の軌道修正を正確にさせていただき、『一つ一つ絞っていきましょう』と励ましてくださり、適格なご指導を賜わったこと、心より感謝をいたします。更に論文の作成に当たり驚きの記憶に留まる事は本論文の「年齢発達による変化を分析し幼児画の様式と特色」を照合する、筆者の研究のテーマの部分に、筆者自身の無頓着にも関わらず引き合わせていただけた、大阪総合保育大学 大学院 学長 山崎高哉 博士先生の「山崎高哉著、『ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義』、1993、Ⅱ部 3章、pp. 186-220」における「図画の教科課程の改定と子どもの描画能力の発達の研究」の、玉川大学出版部の博士論文、厚さ 22 cmの大書でありました。

国立国会図書館全国書誌の著者であられる方が身近に存在しておられるという事実に驚異を感じてしまいました。幅広く人間性を見つめることが出来る様、励んでまいりたいと思います。

この研究を論文として形に出来ましたことは、多くの時間を割いて御熱心にご指導くださった 大阪総合保育大学・大学院の先生方であります。認定こども園 M幼稚園の保護者会の会長 野上彩様をはじめ、お母様方の大いなる成長教育への熱い関心と御理解の賜物であったことです。

最後になりましたが、M幼稚園の教職員の皆様のご理解とご協力を頂き、心より厚くお礼申し上げます。陰になり日向になり論文作成に多大なるお力やアドバイスをくださった 各関係の方々、あらためて、ここに、深く感謝いたします。ありがとうございました。

2016年2月吉日 三浦 瓊子

V. 新たに幼保連携型認定こども園に

全国的年少人口減少の歯止め、女性の社会進出と労働力確保、それに引き攀られるように保育所の待機児現象が急激に起こり、政府の子育て支援方策の下、幼稚園業界にも旋風が吹き荒れた。当園もその渦中にいた。

そして、深い決断をもって、大阪府のアドバイスと国の法案・方向性に従った指導により施設型給付の受け皿を担えるよう、平成27年、新しく幼保連携型認定こども園と変遷を遂げるに至った。今は、時代の変革、社会的現象の少子化の最中での対策の軌道上にあるのが現状である。みどり丘幼稚園は施設型給付 幼保連携型幼稚園と姿を変えている。

つまり、国は認定こども園はこれまで幼保連携型、幼稚園型、保育所型、地方裁量型があったところ新たに「幼保連携型認定こども園」を創設し、学校教育・保育および家庭における養育支援を一体的に提供する施設をしている。この現状の中で、わたくしたちが願う本当の意味での「ファーストチルドレン」は、実現するであろうか。「教育・保育・子育てにおける現代の課題」は、いかがなものか。

少子化対策は、ここ近年、次から次へと打ち出されている。

『こころのインターねっと関西』（第xⅧ巻第5号・通巻第156号 2013年9月20日）によると、厚労省が、2013年9月12日に公表した、「保育所の定員や待機児童の状況」調査では、待機児童 22,741人で、昨年 2012年と比べると 2,084人減少で、3年連続したそうだ。待機児対策として質の低い施設での保育はベストではない。国は、社会保障と税の一体化の中で、子ども・子育て関連3法を成立させ「子ども・子育て会議」で指針を策定しようとしている。この少子化対策は、今に始まったことでなく、今から、28年も前の出生率 1.57 ショックの時代のことからだ。

1. 国の少子化対策の流れ

遡れば、施策としてエンゼルプラン、新エンゼルプラン、その後 2002 年待機児童ゼロ作戦、

2003 年 少子化社会対策基本法、次世代育成支援対策推進法、

2004 年 子ども・子育て応援プラン

2006 年 新しい少子化対策

2008 年 新待機児童ゼロ作戦

減少したかに見えた、待機児童数 2009 年は 25,384 人と膨れ、大きな社会問題となった。政権交代で新たな次世代育成支援で一元的制度を進行、新成長戦略「幼保一体化」を目指し、利用者本位の保育制度に方向性を持ち、改革を見直ししたりしている。抜本的な方法として、多様な事業者の参入を考えたりした。

2010 年「子ども・子育てビジョン」が策定され具体的には、

① 子どもの育ちを支え、若者が安心して成長できる社会

② 妊娠、出産、子育ての希望が実現できる社会

③ 多様なネットワークで子育ての力のある地域社会へ

④ 男女ともに仕事と生活が調和する社会へ（ワーク・ライフ・バランスの実現） 以上を受けて、「幼保一体化を含む新たな次世代育成支援」を明確に一元的な方法について検討できるよう、子ども・子育て会議が発足している。

2012 年、「作業グループ」と 3 つの「ワーキングチーム」が配置され、「子ども・子育て新システム法案骨子」を作成するに至った。

基本制度として「すべての子どもへ良質な成長環境を保障」し「子どもを大切に作る社会」「出産・子育て・就労の希望が叶う社会」とか「仕事と家庭の両立支援」「女性の就業促進」などが目的と掲げられている。

社会全体で、子育て支援、利用者本位を基本とした、すべての子育て家庭に良質なサービスを基礎自治体（市町村）に託し制定、住民のニーズに応じていけるよう努力が求められている。

2. 子ども子育て関連 3 法とは

- ① 「子ども・子育て支援法」
- ② 「就学前の子どもに関する教育・保育などの総合的な、推進に関する法律」
- ③ 「子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育などの総合的な推進に関する法律の施行に伴う関係法律の整備に関する法立」

キーポイントは

- ②の項目が主に整備の法律といえる。
- ①について詳しくみていくと「給付」を施設型給付、地域型保育給付児童手当としている。

「給付」については、

- ア. こども園、幼稚園、保育所を通じた共通の給付の「施設型」
- イ. 小規模保育、家庭保育、居託訪問、事業所内保育の「地域型保育」という仕組みを作った。

「地域」については、

「利用者支援」「地域子育て支援拠点事業」「一時預かり事業」
「乳児家庭全戸訪問事業」「養育支援訪問事業」「要支援児童」
「幼保護児童などの支援に資する事業」「延長保育事業」
「ファミリーサポートセンター事業」「病児・病後児保育」
「放課後児童クラブ」・・・・・・

これらについて、家庭の状況やニーズに応じて市町村（実施主体）が計画的に給付対象などの事業を把握、実施中である。

現状としては教育・保育・子育て等の法律を種々多様に改正している。これまでに、認定こども園には、幼保連携型、幼稚園型、保育所型、地方裁量型があったが、新たに学校教育、保育および家庭における養育支援を一体的に提供する「幼保連携型認定こども園」を創設し、1号・2号・3号とし保育を提供している。ここでは株式会社の参入はない。待機児との解決を図る目的とした施設事業は、子どもの人格形成の重要性を考慮すべきである。

VI. 告示をみる

内閣府・文部科学省・厚生労働省の就学前の子どもに関する教育保育などの総合的な提供の推進に関する法律（抄）の告示をみる。

平成20年3月28日 各省より法律を改定平成21年4月1日より施行となった。

- ・幼稚園教育要領 告示第26号文部科学大臣 渡海紀三郎
- ・児童福祉施設最低基準、保育所保育指針告示第141号
厚生労働大臣 舩添要一
- ・告示第1号 幼保連携型認定こども園
内閣総理大臣臨時代理 国務大臣 麻生太郎
文部科学大臣臨時代理 国務大臣 田村憲久
厚生労働大臣 田村憲久

これを受けて、

Ⅶ. 告示第一号の内容の解釈の研究

幼稚園教育要領・保育指針・幼保連携型認定こども園の原本解釈の下に内容の詳細を検討した。

平成 27 年 4 月 1 日より開始に当たり多少、教諭たちは、タイトな気持ちで、幼稚園における教育課程及び保育所における保育課程の双方の性格を併せ持つ指導計画（年・学期・月・週・日）を作成する研修を重ねた。

第 2 章第 1 「ねらい及び内容並びに配慮事項」の、ねらいは、園児が修了する迄までに期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度の育ちや、培いである。

内容は、幼稚園教育要領「健康・人間関係、環境、言葉、表現」の 5 領域にわたって発達の過程やその連続性を踏まえ柔軟に配慮するよう示されている。

ここでは、保育所保育指針に示されていた「養護に関するねらい及び内容」は、削除されている。しかし、第 2 章 2 で乳児期の園児、満三歳未満、三歳以上の園児、それぞれにおける配慮事項が示されており、保育所保育指針の第 3 章に相当する部分である。

全体構成としては、幼保連携型認定こども園保育要領は、3 章仕立てである。これは幼稚園教育要領に準じている。結果として生活を通じた養護活動、満三歳児の保育の特性や、安全教育、健康教育は配慮事項に記述されている。

今回の法律の内容的には、今までの教育要領や、保育指針の整合性に配慮されており、この機会により充実した教育の在り方を模索し薦められるべきである。

幼児教育への信念と方針は、後ずさりすることは考えられない。「小さきものの声」の著者、柳田国男（1875～1962）は民俗学者であり、詩人、ジャーナリストでもある。彼の思想は、一言でいえば「小さきもの」の価値を見出すことであり「小さきもの」のはたらきが重要である。また、「小

さきものの思想」 p. 309 では、一時期彼は、ヨーロッパ暮らしの中で感じたことを次のように表現している。『小児の泣く声、それから小学校のよどみなど、まるで日本の通りでありましたが・・・・

近くに寄ればいろいろの相違を見ますが、真に現代も「小さきもの」の価値を見出し、その「小さきもの」への教育を成すべきであると。・・・』つまりどの国でも同様ということであろう。しかしながら、「小さきもの」への見方は変わらないであろう。「小さきものの声」に耳を傾ける姿勢をもち続けたいものである。

今日的に表現されるとして、世界的に目をやればシカゴ大学のヘンリー・シュルツ特別待遇経済学教授のジェームス・J・ヘックマンは、次の様に述べている。

Ⅷ. 「幼児教育の経済学 (GIVING KIDS A FAIR CHANCE)」 (ジェームス・J・ヘックマン著、大竹文雄 解説、古草秀子 訳 p p 34~42) の中で「幼児期の教育を上手に実行することは、将来、大きな利益をもたらす可能性がある。・・・子どもが成人後に成功するかどうかは、幼少期の介入の質に大きく影響される。スキルがスキルをもたらし、能力が将来の能力を育てるのだ。幼少期に認知力や、社会性や、情動の各方面の能力を幅広く身につけることは、その後の学習をより効率的にし、それによって、学習することがより簡単になり、継続しやすくなる。」と述べている。

真に「Ⅲ のモンテッソーリの発見：敏感期の見どころ」で目安とした子どもの成長期にぴったりと合った、良い質の環境介入をするべきか理解できると思う。

「幼少期の介入は、経済的効率性を促進させる。」と明言するヘックマンの説は、世界的少子化対策に課題を突き付けていると思う。

激変的に移り変わる国の施策などは、経済上の労働力確保に連動して待機児が一極集中の様に激増し、その対策に大急ぎであれもこれもと多岐に子ども・子育て支援策を裏打ちしている。

成長期の子どもたちは、今何をしたいのであろうか。「小さきものの声」をよく聴き、子どもに教わるべきである。

IX. 『こどもまんなかプロジェクト』を確かなものへ

大阪府挙げての子育て支援対策のキーワード

「こども・まんなか」のプロジェクトをうけて、幼児教育の本当の意味で落ち着いて過去と未来を学び今こそ幼児教育を公平に考え直すべき時と思う。

ヘッグマンは、この事について、「恵まれない環境で、幼少期にきちんとした基礎的スキルを育成しないまま、思春期になってしまうと、状況を改善しようとする介入は、公平性と効率性の二律背反関係に直面してしまう。そして、思春期の介入は、経済的効率性の点から正当化するのが困難であり、一般に収益率が低い。それと対照的に、幼少期に投資を集中し、その後の投資ですれば、公平性と効率性の両方が達成できるのだ。」と明言している。

今日、多くの社会政策を困惑させる事であるが、幼少期までの公平性と思春期からの効率性は少々時間のかかるものの、幼児期の有効な介入は、公平性が効率性につながり上手に発展していくと思われるし、背反関係は、この線上ではほぼ見当たらないのではと考える。

みどり丘幼稚園における幼児教育を教職員たちが多角的にとらえ、子どもの成長が公平に調和あるキューブな育ち振りを呈してくれば、大半の社会政策の難課題の減少につながるのではと考え、常に研究し続けている。

平成 28 年度幼稚園教育理解推進事業（大阪府協議会）開催事項

1. 目的：幼稚園の教育課程の編成をはじめとして幼稚園教育に関する内容についての研究、協議等を行うことにより、幼稚園教育の振興・充実を図る。
2. 対象：幼稚園の園長及び教員・保育所の所長及び保育士
認定こども園の園長及び教員・保育士・公立小学校の校長及び教員
市町村幼稚園教育担当者、市町村教育委員会小学校教育担当者
市町村子ども・子育て支援新制度担当者 等
3. 日時：平成 28 年度 11 月 17 日（木）14:00～17:00
4. 場所：大阪府教育センター 第 3 研究室
5. 内容：【第 2 分科会】 幼保連携型認定こども園みどり丘幼稚園

協議主題 1

幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実施、評価、改善の一連のカリキュラムマネジメントの適切な実施について

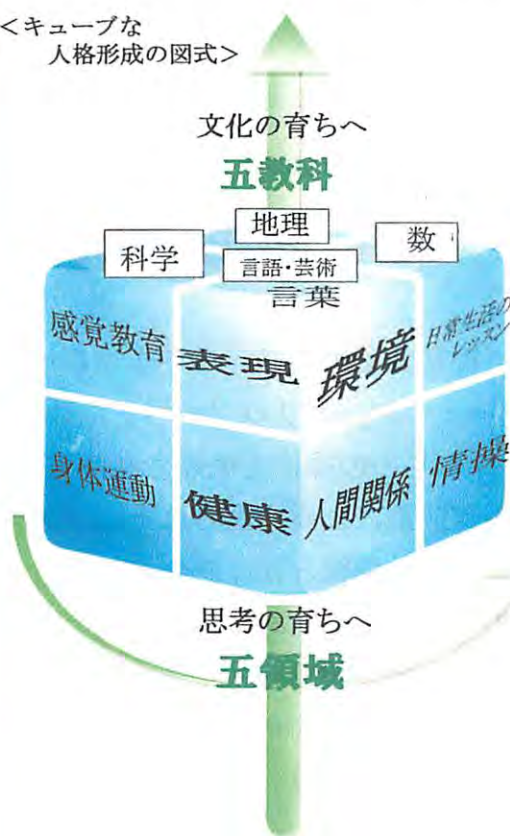
協議主題 2

特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計画的、組織的な指導の在り方について

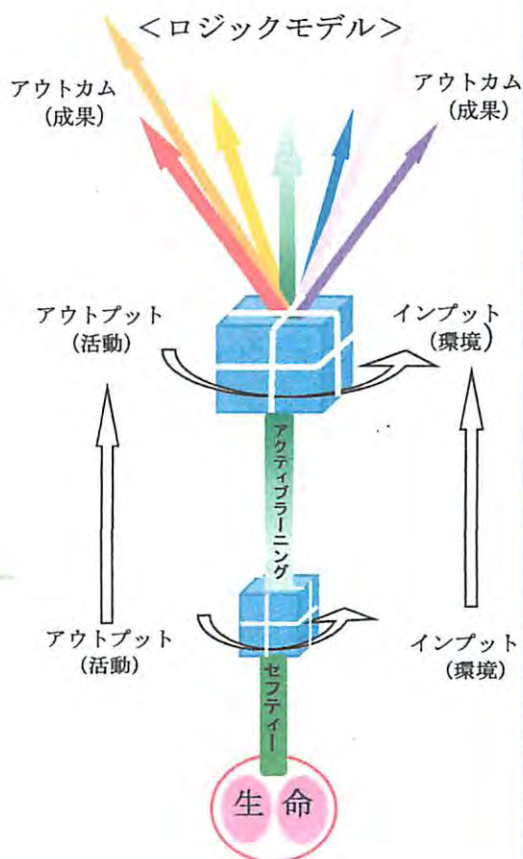
6. 第 2 分科会の実践報告内容

第 2 分科会「幼児と保育者のアクティブ・ラーニングをめざして」

<キューブな
人格形成の図式>



<ロジックモデル>



X. 結びに

1. これからの幼児教育観——子どもとキューブ性

1980年代までの日本の教育界は、当時、一斉保育が主流であり、「子どもの主体性」についてその研究が進みだしてくるのは、1990年代である。

現代は、子育て不安と、それが昂じて幼児の虐待迄に至る痛ましい話題が多い。

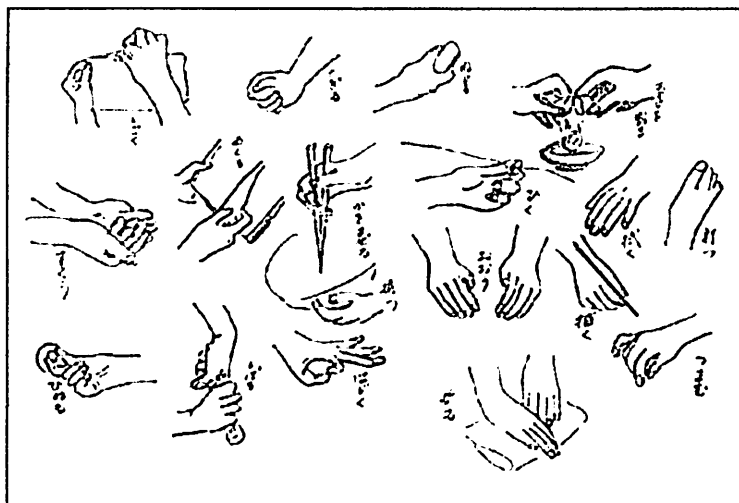
しかし“新しい感覚教育”に出会った母親たちは、子育ての生命の素晴らしさと厳粛さを知り「子育ての本質的な喜びとは、また、いかに感じ取ることができるかどうか」などを求めている。

着々と現在、国、自治体においては、子育て支援の方策を練りだしているところであるが、身近に存在している幼児たちを正確に受け止めるべきである。今後は深く内容を掘り下げる時点にきている。子どもの毎日の生活を重んじ、よく観察をおこない「小さき子どもの声と手の動き」を知るべきである。これからの知的教育の分野の下準備として、子どもの学び方に着目するべきと考える。

特に子どもの手の筋肉運動からの自己受容刺激は、言語運動中枢の形成の進む乳幼児期のみ著しいものである

乳児期に始まる“掴む行為”の発生は、視覚と運動が協応して成立したものであるといわれ、「エリ・ヴェ・フォーミナや、コリッツーバ」たちの研究学者は、“掴む行為”は、極めて、多様なものの操作を発達させる重要な運動であるばかりか、精神の発達も、手の運動によってなされるのである。と力説している。感覚教育により子どもの敏感期と秩序感の下で、意欲的に感覚が研ぎ澄ませることができるよう良質な教育を整えなければならない。そうすれば、子どもたちは、日々の生活の練習を“自己の仕事”として主体性をもって“自立へ向かう子ども”に変化するはずである。

わたくしたちは、子どもたちの多種多様な場面をキューブに何をその手でつかもうとしているかを見つめなければならない。



【キューブな手】

2. 設立25周年を節目に教育の研究報告として

～創立記念 領域別研究の冊子制作・監修について～

教職員が、それぞれの分野で、「遊び」・「健康」「環境自然と科学する心」・「表現」の研究・記録・調査を結果として、大きく括り、25周年を節目に報告書とし纏め、記念研究冊子を制作・監修をした。その内容の要旨は次のとおりである。

「あそび」・・・満三歳児教育の機能あそび

「健康」・・・スイミング・土踏まず形成と幼児の体力

「環境自然と科学する心」・・・ソニー幼児教育プロジェクト 応募小論文

「表現」・・・自我と描画 修士論文

各々の研究領域別の冊子（機能遊びアルバム、ソニー幼児教育支援プログラム研究、自我と描画論文）は、幼稚園の絵本の広場に研究蔵書として保管されている。